



「楽しくみんなと『まちづくり』」

ちだ せつこ 1944年(昭和19年)
栃木県足利市生まれ
南葛西在住
千田 節子



■まるで事務所

「ガサガサして落ち着けないなあ。いったい何やってんだ」って主人が困るほど、我が家はすっかり事務所になってしまったんです。人が出入りする音や始終鳴る電話、食卓には書類の山がで、壁はメモだらけでしたね。

昭和48年、わたしたちは2歳の長男と埼玉県の巨大な北坂戸^{きたさかど}団地で暮らしていました。時代は第2次ピーブーム、新しい団地には当時29歳のわたしと同世代の若い元気なお母さんたちがいっぱいでした。

自治会もやりやすい雰囲気があって、すぐ文化部に入ってね。いろんな催しや文庫活動の手伝いなどを、団地の子どもやお母さんたちと一緒に体験していったの。子育てってこんなに楽しいのかってことも覚えたんですよ。みんな連帯感があったのよね。

「まちはどうやって生まれるんだろう」という好奇心があったんです。ただ箱物ができただけじゃ「まち」にはならない。そこに人が住むようになって、最初は子どもたちがワーッと出て来る。その後お母さんたちも出て来て、お母さん同士が「どこそこの野菜安いわよ」なんて会話するようになる。そういう関わりができて「まち」になるんだなっていうのを、この団地で見てきたの。

ここで生まれた娘が4歳になった昭和54年、主人の転勤のため南葛西のなぎさニュータウンへ引っ越すことになり、「もうおとなしく暮らす」と決めていました。

■動き出した博多人形

昭和19年、8人きょうだいの5番目、3女としてわたしは栃木県足利市に生まれました。読書や作文や歌うことが大好き、活発じゃなく体操が嫌いで体も弱い、家にこもっていたかったですね。真ん丸い顔でいつもニコニコ、じっと座っているだけなので、「博多人形みたいね」って近所の人たちから言われてたの。教師だった父は戦後よく映画館に連れて行ってくれたり、物語を読み聞かせてくれたり、唱歌も歌ってくれたんですよ。

父の書棚の文学も片っ端から読んだし、隣の家では雑誌の「明星」なども読んだの。美空ひばりとかの流行歌も

好きだったんだけど、父が厳しかったので、家では唱歌だけ歌ってました。

わたしが急にガリガリ働くようになったのは、小学5年生の時。当時39歳の父が病気で片足の切断手術をし、亡くなるまでの18年間寝たきりの状態になってね。仕事が忙しくなった母の代りに、わたしが家事をやんなくちゃって。ご飯作りや父の身の回りのことも、やるようになったの。

そのころ、中学1年の兄とわたしで、養鶏をやってみました。ひよこは姉が買ってきてくれて。ピーピー鳴くひよこをミカン箱に入れ電球で温め、ニワトリに育ててね。兄がトタンや板で鳥小屋をどうにか作ったんだけど、台風が来るとニワトリがズブ濡れになっちゃってね。ひよこはどんどん買い足して、多い時は100羽いたかしら。産まれた卵は町のケーキ屋さんが、いつも買いに来てくれたの。

餌の買い出しはわたしの役目だったけど、たまに面倒になってね。その辺に転がってたカボチャを食べさせたら、カロチンで黄身の色が濃くなっちゃったの。そしたらケーキ屋さんに「これじゃあダメだ」って返されてしまったね。研究したわよ。良い卵にするために、餌に葉々や貝殻も加えてみたりして。3年ほど続けたかしら。生計の中心にはならないけど、家の役に立つことがやりたかったの。我ながらたくましくなったと思ったのは、この時かな。それまではほら、博多人形だったんですから。

あのころ、寝たきりになった父は、兄が鳥小屋を建てる時には指示を飛ばし、家計簿を付け、近所の子どもたちを床の周りに集めてそろばん塾を聞くほど、元気だったんですよ。8人の子どもの抱え八方塞^{はっぽうふさがり}だったはずの母が、晩年に「苦^う勞なんて覚えていない」と言ってたけど、わたしも楽しいことや嬉しいことの方が、多かったなあ。姉たちがパイト先でもらったお菓子を、小さく切ってみんなで分け合って食べたのを思い出すの。それに近所の人がよく声をかけてくれたことは、何よりもわたしの元^{もと}気の素でしたね。

■なぎさの大波小波

しまった、と思ったのはこの地域に図書館が無いと聞き、「始めようよ」と言っちゃった後でした。約1,300世帯が暮らすなぎさニュータウンへ越して間もなく、おとなしく暮らす

